

抄 録

「サルワルサン」注射後ニ現ハル、急性反應症狀ノ對「アナフキラキシ」法及「アトロピン」ニヨル療法

George J. Busman; The Journ. of the Am. Med. Ass., May 7, 1921.

メーヨー臨牀ノ皮微科ニ於ケルバスマン氏ノ報告ニシテソノ要旨ハ

「サルワルサン」注射後ニ時トシテ「アナフキラキシ」様ノ反應症狀ヲ現ハスコトアルハ、實地家ノ經驗セル所ニシテ、此反應症狀ハ其個人ノ藥劑ニ對スル特異質ニ因スルモノト見ルベキモノニシテ略ホ之ヲ二ツニ別ツコトヲ得。

即一ツハ注射直後ニ現ハレ、主トシテ顔面「チアノーゼ」ヲ呈シ、呼吸塞迫シ、其他、種々ノ循環及呼吸系統ノ障礙ヲ示シ、他ハ注射後一定時ノ後發現スルモノニシテ、主トシテ劇烈ナル嘔吐ヲ來スモノニシテ之ニ下痢ヲ

伴フコトアリ。

注射後六時間乃至二十四時間ノ入院ノ必要ナルヲ主張スル人々ニハ輕度ノ反應症狀ハ敢テ意ニ介スル要ナキガ如キモ外來患者トシテ治療スル多數ノ實地家ニ在ツテハ多少ノ反應症狀ト雖モ心ヲ勞ス況ンヤ重症ニ於テハ勿論ナリ。

サレバ此豫防法又ハ治療法ハ臨牀家ハ注意ヲ要ス』ト云フ意味ヲ前提トシ、氏ハ此豫防法又ハ療法トシテストークス氏ノ唱導セル、「アトロピン」療法及對「アナフキラキシ」法ノ著明ナル效果アルヲ主張セルモノニシテ、即「サルワルサン」注射後ニ「アナフキラキシ」様ノ反應症狀ヲ現ハセシモノニ、「アトロピン」五十分ノ「グレーション」(〇・〇〇一二五瓦)極量以上ナレドモ五十分ノ「グレーション」以下ニテハ效果少シト)ノ皮下注射ヲ施シテ著效アリ、又ハ既ニ「サルワルサン」注射後反應ヲ來シ或ハ注射毎ニ反應ノ發現セルモノニ對シ、注射二十分前ニ「アトロピン」ノ皮下注射ヲ施シ、又ハ「サルワルサン」注射ノ一時間前ニ、使用セントスル「サルワルサン」ノ十分ノ一量ヲ靜脈内ニ注入セル後、初メテ殘リノ全量ヲ注入スル

所謂對「アトロピン」法ヲ應用シテ大多數ニ於テ此反應症狀ノ發來ヲ豫防シ得ルモノナルモ、尙ホ效果ナキ時ハ此兩法ヲ合併セルモノ即先ヅ注入セントスル「サルワルサン」ノ十分ノ一量ヲ靜脈内ニ注入シ、後二十分ニシテ「アトロピン」五十分ノ一「グレーン」ノ皮下注射ヲナシ、更ニ二十分後ニ「サルワルサン」ノ全量ヲ注入スルニ在リト。(田中抄)

砒素劑ノ靜脈内注射ニ際シ、其技術上ノ過失ヨリ來ル神經障

Dean Lewis: The Journ. of Am. Med. Ass., June 18, 1921.

砒素劑ノ靜脈内注射ハ屢々治療上ニ應用サル、モノナルモ、時ニ其技術上ノ過失ヨリシテ、此藥液ガ神經又ハ神經鞘ニ達スル時ニハ爲メニ其神經ノ官能ニ種々ノ障ヲ來スコトアルハ臨牀家ノ大ニ注意ヲ要スル點ナリトナシ、此症例ノ二例ヲ報告セリ。一例ハ「アルセナミン」ノ貴要靜脈内ニ注射後正中神經分佈區域ニ麻痺ヲ來セルモノニシテ、其療法トシテ觀血的ニ注射部位ノ癰痕中ヨリ

變性セル正中神經ヲ索メ、其變化セル部ヲ離斷シテ神經縫合ヲ行ヒシモノ、第二例ハ同ジク「アルセナミン」ヲ貴要靜脈ニ注射セラレ、其後正中神經及橈骨神經ノ麻痺ヲ來シ、之ガ漸次恢復シツ、アルモノニシテ、兩症例共ニ、其靜脈内注射ト同時ニ、該神經分佈區域ニ劇痛ヲ來セシモノニシテ、氏ハ是等ノ症例ヨリシテ警告シテ曰ク、モシ砒素劑ガ神經又ハ神經鞘内ニ注射セラル、時ハ爲メニ著明ナル破壊作用ヲ來スモノナルガ故ニ、靜脈内注射ニ際シ、初メ少シク注射シテ其際手指ニ放散スル疼痛ヲ來セシ時ハ、針ノ尖端ハ靜脈内ニ存セズシテ藥液ハ神經又ハ其周圍ニ注入サレツ、アルヲ語ルモノナレバ、斯カル際ニハ直チニ其注射ヲ中止セザル可カラズト。(佐藤抄)

中耳ノ内方ヘノ排膿及ビライト氏液使用ニヨル乳嘴突起炎ノ頓挫

ドクトル ジョウ、ア、レーランド述

The Laryngoscope: Vol. XXXI, No. 2, 1921.

中耳ノ排膿ハ自然ニ歐氏管ノ媒介ニヨツテ行ハレル、此歐氏管咽頭開口部殊ニローゼンミュツレル氏窩ガ腺組

織又ハ癒着等ニヨツテ狭クナル際ニハ排膿ガ妨ゲラレ
ル、急性中耳炎ノ九五乃至九九%ハ鼻咽腔ノ炎症ニヨツ
テ來ルモノデアツテ、咽頭扁桃腺ハ呼吸ヲ妨ゲルノミナ
ラズ歐氏管ニヨル排膿ヤ換氣ヲ妨ゲ又之ニヨル吸引作用
ヲ害スルガ故ニ炎症性肥厚、充血等ガアツテ排膿ヤ換氣
ガ中絶サレル際ニ此等ノ官能ノ回復ヲ圖ルコトハ合理的
ノコトデアル。

數年來ノ自分ノ經驗デハ特ニ急性中耳炎ノアル際ニ此
腺性増殖症ノ手術ヲ行フノハ最モ正當ナル時期デアル。
其方法ハ單ニローゼンミユツレル氏窩デ歐氏管咽頭開口
部ノ周圍ヲ清潔ニスルノデアツテ、之ニハ鼻咽腔「キユ
ウレツテ」ヲ用ユ、之ヲ用ユル際ニハ脊柱ノ周圍ニ注意セ
ネバナラヌ、普通ス様ニ早期即二十四乃至四十八時間以
内ニ所置セラレルナラバ鼓室ノ炎症ハ直チニ去ル、猶ホ
又急性中耳炎ニ有效ナダケデナク、癒着性「カタル」性、
又ハ化膿性ノ慢性中耳炎ニモ有效デアル。

次ニ乳嘴突起炎ノ頓挫ニ就テモ亦排膿ヲ試ミル、私ハ
過去六乃至八年間ノ經驗デ乳嘴突起ヲモ己ニ犯カシテ居
ル急性中耳炎ハ鼓膜及ビ外聽道壁ニ多クノ穿孔ヲ作ツテ

之カラ排膿ヲ試ミテ居ル、ソシテライト氏液ヲ用キテ居
ル。

此液ハ一%ノ枸橼酸曹達ト四%ノ鹽類(曹達ノ鹽化物)
トカラナツテ居ル、小サイ穿孔デハ不十分デアルカラ鼓
膜ノ後方デ外聽道骨壁ニ後上方ニ向ツテ骨ニ達スル切開
ヲ加ヘル、猶ホ他ニ三ツノ深イ切開即チシュラップネリ氏
膜ニ於テ後方デ外聽道ノ上方ト外方トニ各一ツ及他ノ一
ツハ前方デ槌骨頸部ノ直グ上ニ加ヘル、而シテ凝血ヲ去
ルタメニ切開後直チニライト氏液ヲ注入シテ、細イ「ガ
ゼ」ヲ挿入シ外聽道入口部ニハ「タンボン」ヲシテ置イテ
此ノ「タンボン」ハ度々交換スルガ「ガゼ」ハ其儘放置シ
テ翌朝ニナツテ初メテ抜イテ更ニ新シイ溫イライト氏液
ヲ注入スル、分泌物ハ非常ニ多量デアツテ之ハ排膿ノミ
ナラズ多少ノ殺菌作用ヲ持ツテ居ル大量ノ淋巴ヲ出ス利
益ガアル、兎ニ角乳嘴突起ノ急性炎症ハ普通一乃至二日
ノ經過ノ内ニハ消失スル、此際又歐氏管ニヨル排膿ヤ換
氣ヲ回復スルヨウニ鼻咽腔ヲ所置スルコトガ有效デア
ルコトヲ忘レテハナラヌ。

ライト氏液ノ使用ト切開トニヨツテ若シ餘リ時期ガ遅

レテ居ナイナラバ殆ンド各例ニ於テ成功スルモノデアツテ、最モ必要ナノハ出來ルダケ早期ニ行フコトデアツテ其レハ炎症性堆積物ヲ去ツテ後ニ來ル所ノ聽力障礙ヲ豫防スルコトガ出來ルカラデアル。(笠井抄)

失聲症ノ療法トシテノ喉頭球

Muck; Münch. Med. Wochenschr. März 25, 1921.
(The Journ. of Am. Med. Ass. May 21 卅ノ第 5 卷ヨリ)

戰時中ニムック氏ハ戰時失聲症ノ療法トシテ、喉頭内ニ一小球ヲ挿下スル法ノ效果アルヲ發表セルガ、氏ハ尙ホ此方法ガ平時ニ於テモ亦有效ナルヲ唱導セリ。聲樂者、說教者、教師及俳優等ニシテ其聲音ニ障礙ヲ來シ、而モ其聲唇ニ器質的變化ヲ缺如セルモノニ本法ヲ應用スルコト數回或ハ時ニハ一回ニシテ其障礙ノ輕快シ又ハ全治スルコト多シト。而シテ此效果ヲ來ス理由ハ、其際患者ノ窒息セントスル感覺ノ恐怖ガ、聲音反射ヲ促進スルニ在リ、是ニヨツテ二十年間モ連續セシ失聲症ノ一回ノ療法ニヨリテ治癒セシ例アリト。(田中抄)

急性「アボモルヒネ」中毒

E. Seuffer 氏 (Münch. m. W. Nr. 19, 13 Mai, 1921) 曰ク卓越セル吐劑「アボモルヒネ」ハ個人的耐性ニ甚シキ差違アリ。不耐性個體ニテハ其微量ニテ重症中毒ヲ呈ス (Kobert, u. a.)。著者ハ一喉頭「デフテリー」患婦ニ鹽酸「アボモルヒネ」〇・〇〇三瓦(一%溶液トシテ)皮下ニ應用セリ。嘔吐ハ來ラズ。中毒症狀一頻數且淺表呼吸。脈搏緊張弱ク。皮膚蒼白。顔、手「チアノーゼ」。冷汗。運動性乃至精神的不安。瞳孔極度散大。反應缺如一等ヲ發來ス。「カンフエール」油、「アドレナリン」及濃厚食鹽液等注射ニテ徐々ニ恢復ス。著者使用ノ「アボモルヒネ」液ハ稍陳舊ニシテ且綠紫色ヲ呈シタリ而モ Trendelenburg 氏ハ其化學的ニ異常ナキヲ確證セリ」ト。(島岡厚吉抄)

スタイナーハ教授ヨリ若返リ法ヲ受ケタ
男ノ頓死

「ロンドン通信」The Journ. of Am. Med. Ass. June 18, 1921)

「如何ニシテ余ハウキーンニ於ケルスタイナーハ教授ニヨリテ二十歳若

返ヘリシカ」ト云フ演題ノ下ニロンドン市ニ於ケル最大會場ナル「アルバー
トホール」テ講演セントシ非常ナル前氣ヲ喚起サセシ七十五歳ノ一男子
ガ凡テ其講演ノ準備ノ整頓セル前夜ニ突然トシテ急死セルコソ笑止ナレ。
彼ガ本年初頭ウヰーン行キテ企テ十一週間ニシテ頗ル若返ツテ歸英シ、且
ツ彼ハ、手術後彼ヲ看護セル三十五歳ノ一看護婦ト結婚準備中ナリト言ヘ
リ。而シテ彼ハ既ニ地方ニ於テ一回之ニ就テ講演セルガ、其後全國内ノ實
業家ヨリ彼ニ對シテ其經驗ニ關シ質問ノ來ルコト雨ノ如ク、遂ニ彼ヲシテ
ロンドンニ出テ、其實驗ヨリ得タル幸福ヲ世界ニ示サントセシムルニ至リ
タルモノニシテ、此講演ヘノ入場切符ハ羽ヲ帯ビシ如ク飛ンテ賣レ行キ、
單ニ一般市民ノミナラズ之ニ就テ科學的興味ヲ有スル醫師及科學者モ亦競
フテ之ヲ求メタリ。然ルニ豈圖ランヤ若返リ者ハ其講演日ノ朝彼ノ寢臺上
ニ頓死セルヲ發見セラレテ萬事休シヌ。彼ヲ診察セル醫師ハ其死因ヲ狭心
症ニ歸セリ、蓋シ一箇月以前ニ彼ハ彼力如何ニ強健ナルヤヲ示サンガ爲ニ
自ラ左胸ヲ叩キテ僂人ニ誇リシニ其後該部ニ疼痛アリトテ此醫師ノ診察ヲ
受ケシコトアリシト。此死者ノ一從兄弟ハ彼ガウヰーンヨリ歸リシ時ハ以
前ヨリ餘程若ク見エシコトヲ證シ、且ツ彼ハ其手術料トシテスタイナツハ
教授ニ七千圓支拂ヒタル旨ヲ語レリト。尙ホ彼ハ死亡前一記者ニ語リテ曰
ク「余ハスタイナツハ教授ニ此手術ノ效果ハ何年連續ス可キヤヲ質セルニ
教授ハ笑ヒ乍ラ答ヘテ「二十年乃至三十年」ト。即チ余ハ教授ニ「然ラバ私
ハ只今七十歳ナレバ、百歳ニナツタ時ニハモ一度手術ヲ御願ヒ致シマス、
ソースレバ多分百五十歳迄ハ生キルデシヨウ」ト申シ置ケリ」ト。

(田中抄)

雜報

●會員動靜

敘勳四等授瑞寶章

從六位勳五等

重富 貫二

(六月二十七日)

敘正五位

從五位

藤田 秀太郎

敘正六位

從六位勳四等

漆原 亮平

敘正六位

從六位勳五等

藤掛 三郎

敘正六位

從六位勳四等

片山 雄

敘正六位

從六位勳四等

武部 元雄

敘從六位

正七位

森本 末吉

敘從六位

正七位

野田 諦俊

敘從六位

從六位勳五等

松原 愛次郎

敘從六位

正七位勳六等

守山 貞二

敘從六位

正七位勳五等

藤河 喜人

免本官專任福岡縣技師

防疫官兼福岡縣技師

高畑 運太